

平成19年 1月

金治新悟 学位論文審査要旨

主 査 村 脇 義 和
副主査 井 藤 久 雄
同 池 口 正 英

主論文

Expression of Polo-Like Kinase 1 (PLK1) protein predicts the survival of patients with gastric carcinoma

(ポロ様キナーゼ1(PLK1)蛋白の発現は胃癌患者の予後を予測する)

(著者：金治新悟、齊藤博昭、辻谷俊一、松本幸子、建部 茂、近藤 亮、尾崎充彦、井藤久雄、池口正英)

平成18年4月 Oncology 70巻 126頁～133頁

審 査 結 果 の 要 旨

本研究は胃癌組織におけるPolo-Like Kinase 1 (PLK1) 蛋白発現と患者予後との関係を免疫組織学的に検討したものである。その結果、胃癌160例のKaplan-Meier法による生存解析では、5年生存率はPLK1蛋白陰性群75.0%、陽性群54.8%とPLK1蛋白陽性群で有意に患者予後が不良であった。また、PLK1蛋白発現とP53蛋白発現の間には相関は認めなかったが、PCNA-LIはPLK1蛋白発現陽性群が陰性群に比べ有意に高値であり、胃癌細胞におけるPLK1蛋白発現と細胞増殖活性が密接に関連していることが判明した。これらの結果は、胃癌治療においてPLK1蛋白発現の解析が予後予測につながる可能性を示唆したものであり、胃癌患者の予後予測の面で明らかに学術水準を高めたものと認める。